

ハスカップの歴史

はじめに

ハスカップはかつて、胆振管内の勇払原野、及び白老から苫小牧、厚真、早来、千歳の一帯周辺に沢山自生していて、古くからこの地域の人々に利用されてきました。今回、ハスカップがどのようにしてこの地域の人々と密接につながっていたかを、「ハスカップの歴史」として取りまとめました。

この資料の取りまとめにあたっては、苫小牧郷土文化研究会の了解を得て、「苫郷文研まめほん1、ハスカップ物語」(奥津義広著、岸本安則編、苫小牧郷土文化研究会まめほん編集部発行)から記載内容を抜粋し、時系列に編集しました。

1 勇払原野とハスカップ

勇払原野、現在の苫小牧の市街地や苫東工業団地となっているところには、全国でただ一カ所のハスカップ大群生地があった。



勇払原野の原風景を残す美々川支流ペンケナイ川上流部
「中居正雄著：とまこまの植物」苫小牧民報発行より

なぜ、勇払原野にハスカップの大群落が出来たか、それは、厳しい自然条件が生育にぴったり合ったため。言い換えれば、他の植物があまり育つ事が出来ず、過酷な条件にも育つハスカップが生き残ったとも言える。勇払原野には、ハナゴケやエゾイソツツジ等の高山植物の群落があるが、ハナゴケが平地で自生しているのは全国でも勇払原野だけと言われており、原野の自然条件の過酷さが伺える。

そもそも、ハスカップはどこから来たのか。はっきりとした答えはないが、おそらく、シベリアなどから渡ってくる鳥が向こうで実をついばみ、糞と共に原野に種を落としたものだろうと言われている。そして、原野の自然環境が“生まれ故郷”のシベリアに似ていたため、群落が広がったと考えられる。

2 開拓期～戦前

昔は、ハスカップは苫小牧周辺にはいくらでもあったので、地域の人々には大変なじみの深い果実であった。小学生が学校帰りにハスカップを摘みながら帰ったり、放課後にハスカップを摘みに行ったりなど、ハスカップ摘みの思い出は、この地域に古くから住んでいる人ならだれでも持っている。

この地域では、ハスカップは古くから塩漬、砂糖漬、焼酎漬などの保存食として利用されてきた。昔は、ハスカップの塩漬けが梅干し代わりに食卓に上がっていた家庭も多く、梅漬けが手に入りにくくなった時には、農家さんが出面さんに給食するために梅漬けの代用として塩漬けを使っていた。また、終戦直前の

昭和20年(1945年)の夏には、陸軍がハスカップ摘みに女学生を動員したこともある。物不足が一段とひどくなったところで、当時の女学生は「兵隊さんの食べる梅干し代わりにするため」と聞かされ、百人近くの生徒がトラックに分乗して沼ノ端の、今は港になっている辺りに出かけたそうだ。

ハスカップ製品の販売の始まりは、大正12年に沼ノ端駅に近藤待合所(個人の待合所)を開業¹⁾した近藤武雄氏によるもの。戦前、沼ノ端駅は鉄道のターミナル駅として賑わっており、駅周辺にはハスカップが一面に生えていた。そのため、何とかこれを利用できないものかと考えた近藤氏は、ハスカップの実を道の農事試験場に持ち込んで成分分析をし、昭和8年(1933年)にハスカップ羊羹・ハスカップ最中を考案。次にハスカップ飴も生み出された。これらを駅の立ち売りとして行われたのが最初であり、沼ノ端名産としてなかなか評判が良かった。



昭和10年代に売られたハスカップ羊羹

羊羹は、ハスカップジャムと白あん、ザラメを原料としたもので、形は四角いものと丸いものがあった。白あんにハスカップを果汁ごと沢山練り込んであったため、色は綺麗な深い紫色だったという²⁾。

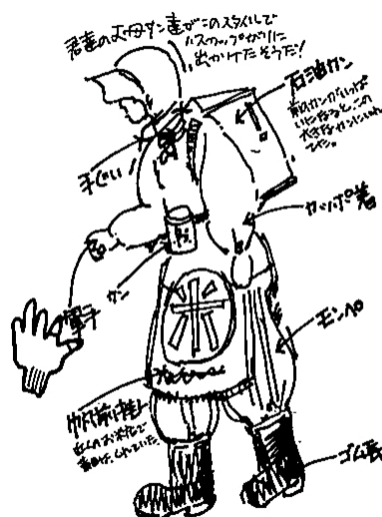
ハスカップ羊羹は昭和11年9月、陸軍特別大演習で来道した天皇陛下に献上されている。戦前の当時、天皇陛下に献上することは大変な名誉であり、宮内省から表彰状を受けている。

太平洋戦争中の昭和18年(1943年)には、ハスカップジャムやジュースも販売され、ハスカップという名称は、これらの製品によって広められ、その快い響きから一般の人が好んで使うようになった。しかし、戦争が激しくなって砂糖の配給が切れたため、昭和18年か19年頃(1943年か1944年)、ハスカップ製品は製造中止となった。

3 戦後～苫東開発まで

沼ノ端小学校では戦後まもない昭和22～23年当時、「ハスカップ休暇」と言って、ハスカップの最盛期の7月に、3日間休校となり、その間、生徒たちは隣接するハスカップ群生地で摘み取りを行っていた¹⁾。この地域では、ハスカップが生活の一部となっていたことが伺える。

昭和30年(1955年)頃からは、三星がハスカップ製品(「よいとまけ」、「羊羹」)の製造販売を開始し、その頃から、ハスカップ摘みの人たちが急激に増えた。同社がハスカップを原料として買い入れることになったことや、同社の製品がハスカップの知名度を一段と広めたためである。ハスカップの買い付けは当時、沼ノ端駅前の星野商店が一手に行っており、それは、自生地の開発が進む昭和40年代まで続いたという²⁾。



ハスカップ摘みのスタイル

Small Town Talk T 1980.6.25 より

リュックサックの中に一斗缶を入れ、手に手に小さな缶を提げてハスカップ摘みに繰り出す人は「ガン

ガン部隊」と呼ばれ、当時の市営バス上厚真線は、群生地沼ノ端、柏原、静川を通ることから、ハスカップの季節になるとハスカップ摘みの人で百名近くの行列になったとのこと。殆どは小遣い稼ぎの主婦、おじいちゃん、おばあちゃんだったが、なかには、小さなミルク缶片手にハスカップを摘みに行った小学校の生徒も多かった²⁾と聞く。ハスカップをミルク缶一杯に摘むと、当時で数百円にもなったため、7月の苫小牧のお祭りのおこづかい稼ぎにちょうど良かったそう²⁾だ。

摘み取られたハスカップは市場にも出荷され、苫小牧市内の青果店などに並べられている。丸一苫小牧中央青果の話によると、昭和46年に苫小牧市公設地方卸売市場が開設されてからずっと取り扱っているが、それ以前にも入荷はあったという。

その後、苫小牧港と臨海工業地帯の建設で自生地が多くが消え、今や、自生するハスカップが見られるのは、弁天沼周辺など勇払原野の一部と、ウトナイ湖岸などだけになってしまった。ちなみに、苫小牧に残された野生のハスカップは、昭和53年頃には、航空写真や現地調査による苫小牧市環境部の推計で、約7万本と推定された。平成19年現在、そのようなデータは存在しないが、多分、もっとも減っているだろう。

4 ハスカップの保護の動き

昭和45年(1970年)に、苫東開発を主眼とした第3期北海道総合開発計画が閣議決定された。このため苫小牧郷土文化研究会は、昭和46年5月、苫小牧市長や市議会議長に「十万市民の願い」と題してハスカップの保護を要望した。「勇払原野に自生するハスカップを開発の犠牲にしないで」というものであった。

市もハスカップ保護に本格的に取り組む姿勢を示し、昭和48年4月には、ハスカップ移植協議会を開いて移植計画等について話し合った。その後、ハスカップは市内に数千本単位で移植されている。また、市は、臨海工業地帯に進出した企業に対しても、ハスカップを保存して欲しいと要望し、ある工場では、敷地内にあったハスカップを社宅周辺に植えたりしていた。

苫小牧東部地域を開発するために設立された(株)苫東でも48年から55年にかけてハスカップ移植を実施してきた。工事に先立って希望者に案内をしたところ、申込が全道各地から殺到し、1市3町の住民より1127件、各種団体から42件、地域外から192件に及んだ。この結果37,000本のハスカップを移植した。



シベリアで見つけたハスカップ
中居正雄著「とまこまいの植物」: 苫小牧民報
発行(2000)より

ハスカップの移植が進められている昭和53年から56年ごろには、奥津義広氏、中内武五郎氏、遠藤未満氏等が、北海道新聞や苫小牧民報などでハスカップに関する興味深い話を連載し、苫小牧の植物を研究していた中居正雄氏は、ハスカップの源流を求めてシベリアへ調査に出かけている。

また、昭和 54 年には苫小牧商工会議所の提唱で「ハスカップを考える会」が結成され、ハスカップウィークというイベントもスタートした。昭和 57 年には、苫小牧市で「ハスカップシンポジウム」が開催されるなど、ハスカップ保護が市民運動として盛り上がりを見せた。

5 ハスカップ栽培の歴史

北海道立林業試験場（美唄市光珠内）では、ハスカップの増殖・栽培の本格的な試験を昭和 48 年頃から開始した。当時の樹芸樹木科長中内氏は苫小牧育ち。「工業開発で勇払原野のハスカップが減っていることを知り、なくなったら市民ががっかりするだろうと思い、なんとか増やせないか」と。その成果を受け、中内科長らの指導で、千歳市周辺の農家でハスカップ栽培が始められた。

その後、新千歳空港工事により群生地が壊されることとなったため、昭和 53 年(1978 年)頃から、千歳市農協と農家が千歳空港周辺や自衛隊演習地に自生するハスカップ株を採集し、農家の転作田に栽植して組織的な栽培が始められた。美唄市内でも昭和 52 年(1977 年)からハスカップ栽培が行われている。苫小牧の三星から委託されて栽培している。昭和 50 年代、この頃のハスカップ果実は絶対量が不足で、取引価格は 3,000～4,000 円/kg と極めて高く、特に有利な転作作物としてとり上げられ、北海道各地で急速に栽培面積が増加した

昭和 56～57 年(1981～82 年)には、苫小牧市や厚真町でも苫東工業開発が始まった勇払原野から山どりした株の栽培が進められた。ハスカップは昭和 55 年から 57 年の 3 ヶ年で苫小牧西港の臨海工業基地や苫小牧東部工業基地の企業立地予定地から約 23,000 株が農家に移植され、昭和 56 年 5 月 2 日に苫小牧市農業協同組合が苫小牧市ハスカップ生産振興会を設立してから農作物としての栽培が本格化した。



厚真町の農場におけるハスカップの収穫作業の様子

昭和 62 年からは、農家によるハスカップ栽培が軌道に乗り、安定供給の見通しができた。公設苫小牧地方卸売市場によると、厚真町農協をはじめ、穂別、鶴川の各農協からの入荷は、約 8 割が栽培物で、山採りの持ち込みは 2 割にすぎないという。

昭和 55 年（1980 年）に 13ha であった栽培面積は、10 年後の平成 2 年（1990 年）には 167ha に達している。しかし、生産量の急増によって需要と供給のバランスが崩れ、果実価格が kg 当たり 1,000 円前後まで下落したことから栽培熱が冷め、平成 3 年（1991 年）の 169ha をピークに栽培面積が減少し、最近では 80ha 前後とピーク時の半分までになっている。

しかし近年では、徐々に需要も伸びる傾向にあり、農家もハスカップ栽培に力を入れている。苫小牧、厚真、鶴川、富川の各農協では、苫小牧地区ハスカップ協議会を設立し、キロ当たり 1,500～1,700 円の異物の混入のないハスカップを供給するようになった。市内の菓子工場では、美唄や苫小牧近郊の農家と契

約し、安定供給の見通しがついた。

平成4年からは苫小牧の23戸の農家が新品種の手スカップ苗を約2000株導入した。これは、道立中央農業試験場が「ゆうふつ」という名称で品種登録をしたものである。

おわりに

最近では、自生する手スカップを採りに行く姿は殆ど見かけなくなった。しかし、苫小牧市民の原風景とも言うべき勇払原野、その原野のシンボルとも言える手スカップを楽しむ文化は、今なお苫小牧に根付いている。

手スカップは市場にも出荷され、苫小牧市内の青果店などに並べられている。手スカップが青果市場で競りにかけられ、スーパーで売られているのは、全国広しといえども苫小牧ぐらいである。そして、砂糖をまぶして食べたり、ジャム、ジュース、リキュールなどに加工されたりして、郷土の味として親しまれている。

この地域では、手スカップを生産農園に摘み取りに行く人も多い。そこで、厚真町では平成20年度から厚真町観光協会と連携して、町内8戸の手スカップ栽培農家の情報を、「手スカップ狩りMAP」としてインターネットによる公開を始めた。今後、市民が手スカップと親しむ機会の拡大に繋がるものと期待される。

また、苫小牧では平成19年度から、地域の手スカップの加工に携わる中小企業家らや研究者で構成される産学グループが中心となって、地元産の手スカップを活かして地域の活性化に繋げる取り組みがスタートした。これは、近年注目されはじめている手スカップの優れた機能性の解明と、その機能性を活かした商品開発を目的とするもので、今後、新たな地域ブランドの誕生が期待されている。

出典：「苫郷文研まめほん1、手スカップ物語」(奥津義広著、岸本安則編、苫小牧郷土文化研究会まめほん編集部発行)

- 1) 「沼小100年の歩み」(苫小牧市立沼ノ端小学校100周年記念誌)
- 2) 沼ノ端駅前 星野商店 関係者 星野邦夫氏による



手スカップの競りの様子



苫小牧のスーパーで売られる手スカップ